

J・S・バッハの『コラールとオルガン小曲集・BWV599~644』について

高田重孝

オルガンのための数多くの作品を残した J・S・バッハは、その数と質においてもオルガン作曲家として最高峰に位置する。特質に値することは、多くのオルガン曲が礼拝のために作られていることである。宗教改革（1517 年）後のプロテスタント教会では、会衆が礼拝に参加する時に、信仰の告白として讃美歌『コラール』を歌った。会衆は讃美歌（コラール）の歌詞と旋律を熟知して礼拝に参加していた。宗教改革の 168 年後、1685 年 3 月 21 日に生まれた J・S・バッハは、そのコラールの旋律が持つ歌詞を、神学的に、礼拝学的に、音楽的に解釈して作曲して、礼拝の時の会衆がコラールの讃美の後に後奏曲として演奏して、会衆に歌詞の意味を黙想させた。時にはコラールに先立ち前奏曲として演奏して会衆の心をコラールとともに礼拝の主題に向けさせ整えさせるために使用された。この目的のために作られた最大の作品が『オルガン小曲集』である。当初、バッハは待降節に始まる教会暦の順に従った 1 年分の典礼に必要なコラールを 164 曲選び、そのすべてに作曲するつもりでいた。残されている自筆譜の 182 頁からなる楽譜帳の 1 頁ごとの左上に 164 のコラールの題名が書き込まれていることから明らかである。しかし実際に楽譜として書かれたのは 45 曲である。（断片として記されている 2 曲が別にある）バッハがこの曲集を計画したのは、おそらく 1713 年のことで、それはこの曲集で使われているコラールの底本となった『ワイマール讃美歌集』が出版された直後のことであり、バッハはこの新しく出版された『ワイマール讃美歌集』に影響を受けて、オルガンによる黙想曲集として『オルガン小曲集』を計画した。待降節のコラールから順次作曲を始め、クリスマス（降誕祭）、年末年始、聖燭祭、キリストの受難・復活祭、キリストの昇天、聖霊降臨祭（ペンテコステ）位までは作曲されたが、聖霊降臨祭以後のコラールに関してはわずかにしか作曲されていない。実際に作曲された 45 曲のうち、40 曲は 1713 年から 1716 年までに作曲されているが、残りの 5 曲は 1713 年以前に書かれたコラール前奏曲が転用されて使われている。その後は、何らかの理由で中断してしまった。理由についてはワイマール時代、宮廷楽士長としての作曲、演奏の職務が多忙になったこと、その中に 4 週ごとに 1 曲ずつカンタータの作曲が義務付けられ、城内教会で演奏された。カンタータの作曲が、教会音楽家としてのバッハの中心的な仕事になり、ワイマール時代に、教会暦に沿ったかなりの数のカンタータが作曲された。言葉を持たないコラール前奏曲より御言葉を直接歌う方が、より思想の伝達方法として有利なこと、カンタータの性質上、『コラールとコラール前奏曲』が併せ持つ思想形式が、より発展した形でバッハの中に新しい形をもたらしたこと、カンタータの形式が、御言葉に沿った神学的、音楽的發展を可能にさせたこと。従ってバッハが当初計画した『コラールとコラール前奏曲』の大部分がカンタータの中で具現化され作曲できることがバッハに判ったこと。ワイマールの領主との軋轢がバッハにケーテンの宮廷楽長に移ることを決心させたことにより、ワイマール時代が予定外に短縮で終わったこと等が考えられる。未完成で終わってしまった『オルガン小曲集』だが、バッハにとっては最初のもまとまった重要な作品集であり、非常に完成度の高いコラールの旋律を主題としたオルガン曲集である。

【解説・高田重孝】

コラール曲目解説

主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland・BWV599

原詩はイタリア・ミラノ大聖堂の大主教だったアンブロシウス(Aurelius Ambrosius, 339~397) のラテン語の単旋律聖歌の讃歌『Veni redemptor gentium・主よ、来てください、異邦人の救い主よ』。アンブロシウスはドイツのトリエールに 339 年頃に生まれ、ローマで政治学の高等教育を受け、北イタリア地方の知事を務めていた。西方教会・カトリック教会で洗礼を受けて、ミラノの司教になった。当時から 4 大教父のひとりとして認められていて、神学者、説教者、教会指導者として卓越した指導力を発揮して、西方教会の土台を築いた。特に礼拝音楽の上で、当時の東方教会で歌われていた、詩編の交唱歌様式(アンティフォナル・Antiphonae) を西方教会の礼拝様式の中に導入して確立した。西方教会におけるラテン語による聖歌の発展の基礎を築いたと言われている。当時のローマ、ガリア、モザベラ聖歌と並んで、ミラノのアンブロシウス聖歌として、西方教会における初期の礼拝音楽の基礎を築き、音楽の発展に大きな足跡を残している。旋律はアンブロシウスの原詩に付けられた中世初期の単旋律聖歌で、1524 年の宗教改革後にマルティン・ルター(Martin Luther 1483~1546) が、初期の宗教改革後のルター派の教会音楽を構築するために、当時カトリック教会で歌われていた有名なこの聖歌をドイツ語に訳して、ルター派の教会讃美歌に採用した。歌詞はキリストの誕生により『異邦の人々』にもキリストによる救いがもたらされたこと、その『受肉の神秘』について歌っている。

この讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。教会暦の順に編成されている讃美歌集では、アドヴェント・待降節の最初の讃美歌に収録されている。バッハも『オルガン小曲集』を編成するに当たり『ヴィッテンベルク讃美歌集』に倣い、『オルガン小曲集』の第 1 曲目にこの讃美歌を選んでいる。

アンブロシウスのラテン語の単旋律聖歌の讃歌『Veni redemptor gentium・主よ、来てください、異邦人の救い主よ』はキリスト教の創作讃美歌としては最も古く、400 年前後より歌われてきた。この歌詞は 1524 年の宗教改革以前から歌われていて、1300 年代にはすでにドイツ語に訳されて歌われていたことが、残されている当時の文献から証明されている。ルターによって、宗教改革後にドイツ語に翻訳し直されて、今日までこの歌詞で歌われ続けている。

ルターは 1517 年、当時のカトリックの教義に疑問を抱き、ヴィッテンベルク城内の教会の扉に、かの有名な『95 カ条の提題』を掲げて、カトリック教会の改革を迫ったが、教会側との交渉が決裂したために孤立して後に教会側から命の危険に曝されたために、カトリック教会と決裂、新しい宗教・宗派を改革するに至った。カトリックでは、聖書は聖職者のみに読むことが許されていたが、ルターは、すべての人々が聖書を読めるようにするために、聖書のドイツ語訳を完成させ、カトリックとは違うルター派独自の礼拝順序の改訂と見直し、自国語・ドイツ語による教会教義の確立を推し進めた。それに伴い、会衆が礼拝に直接参与する讃美歌の導入が不可欠になった。ルターは色々な方法で讃美歌を創作したが、これら讃美歌の中の重要なものは、伝統的にカトリック教会や修道院で歌われていた伝統的礼拝用のラテン語聖歌をドイツ

語に翻訳して、旋律に合わせてドイツ語化している。

J・S・Bach 『教会カンタータ 36 番、61 番、62 番』

『ライプツッヒ・コラール集 BWV659~661』

コラール編曲、699、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 4 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 264、265 番。

讃美歌 21 229 番。ルーテル教会讃美歌 1 番。聖公会聖歌集 59 番。

バプテスト教会新生讃美歌 156 番。(訳詞・高田重孝訳)

神の御子は我らのために・Gottes Sohn ist Kommen・BWV600

J,シュパンゲンベルク (Johann Spangenberg, 1484~1550) の歌詞『神の御子は我らのために』は美しいアドヴェント・待降節の讃美歌、また『三位一体を称える讃美歌』として説教の前に、また他の地方では『キリストの誕生についての説教の後』に歌うように規定されている。

J,シュパンゲンベルクはドイツ中部、ゲッティンゲンの近郊、ハルデーゲンに生まれ、ハルツ地方ノルトハウゼンの牧師を務めた。ルターとの関係も深く、ルターの生まれたアイスレーベンの教会監督となり、1545 年には『教会讃美歌集』を出版している。

『神の御子は我らのために』の讃美歌はボヘミア兄弟団教会で歌われたといわれている。

旋律は M,ヴァイセ (M,Weibe, 1488~1534) の作曲で、1531 年に出版されたボヘミヤ兄弟団の最初の讃美歌集に収録されている。原旋律はグレゴリオ聖歌の讃歌『天の支配に栄えあれ・Ave hierarchia celestis』。15 世紀からよく知られて歌われていた。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 5 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 115 番。

讃美歌 21 232 番。(訳詞・高田重孝訳)

神のひとり子、主なるイエスよ・Herr Christ, der einig' Gott's Sohn・BWV601

原詩はアウレリウス・クレメンス・ブルデンティウス (Aurelius Clemens Prudentius, 348~413?)。スペインに生まれ高等教育を受けて裁判官となり、ローマ皇帝の側近として仕えた。ローマに旅した時に初期キリスト教徒の遺跡を見て感動し、回心して修道院に入った。多くの宗教詩を創作して『日々の讃美歌・Hymus Omnis Horae』として出版された。彼の宗教詩は部分的に西方教会の讃美歌や礼拝式文に取り入れられて、今日まで伝えられている。

原旋律の Divinum Mysterium は、11~15 世紀頃に西方教会で確立されたグレゴリオ聖歌の単旋律聖歌で、ミサ通常文サンクトゥスのトロープス (Tropus) から派生した。トロープスとは、ミサの式文の一部分を母音で引き伸ばして歌う部分に別の歌詞を入れ替えて歌う中世に発達した技法である。

ドイツ語歌詞 (訳詞) はエリサベツ・クロイツィガー (Elisabeth Kreuziger 1505~1535)、リガのトリプトウの修道院の尼僧だったが、J,ブーゲンハーゲンにより改革派に改宗し、後に、

牧師・説教家でありヴィッテンベルク大学でルターの同僚となる C. クロイツィガーと結婚した。プロテスタント教会最初の女性讃美歌作詞家である。この歌は 1524 年に出版されたヴァルターの讃美歌集に収められ、アドヴェント（待降節）第 4 主日の讃美歌として定着した。ライプツィヒでは公現後第 6 主日、三位一体後第 13 主日、第 18 主日にも歌われた。

旋律は世俗歌曲『私は一人の娘が嘆くのを聞いた』に由来する。この当時、民衆に親しまれていた多くの世俗歌曲の旋律が讃美歌の旋律に転用されて歌われている。

バッハはエリサベツ・クロイツィガーのアドヴェント（待降節）の歌詞に触発されて作曲した。

バッハは当初の計画通り『コラル前奏曲集』の 3 番に置いている。

原讃美歌では、前半が反復され、後半は反復されないが、バッハは後半にも反復記号を付けて繰り返しをしている。同じ例が『オルガン小曲集』の中にこの曲を除き 3 曲ある。

（BWV612, BWV632, BWV633,）

ソプラノによって歌われる旋律の下に讃美歌からとった主題（モチーフ）が対位的に展開されて、その讃美歌の性格を形づける手法が、16 分音符により、アルト、テノール、バスの順序に現われ、この曲全体を形作っている。この手法は『オルガン小曲集』の中でしばしば現れる典型的な編曲手法である。この主題（モチーフ）は讃美歌の最初の旋律の第 1、第 3、第 5 の音を組み合わせたものである。分散和音によるファンファーレ風の主題（モチーフ）・『主キリストよ・Herr, Christ』は、終始、単独で、また他の声部と重なり合って呼び交わしている。この主題は、主キリストに人々が求める祈りや願い、苦しみや悲しみからの救いの叫びである。

J・S・Bach 『教会カンタータ 22 番、96 番、132 番、164 番』

コラル編曲、698、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 67 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 127, 128 番。

讃美歌 21 には収録されていない。ルーテル教会讃美歌 60 番。 （歌詞・高田重孝訳）

神に譽れあれ・Lob se idem allmächtigen Gott ・BWV602

原曲はラテン語の讃歌『Conditor alme siderum』または『Creator alme siderum』。9 世紀初期頃から、修道院において、待降節（アドヴェント）第 1 主日の聖務日課の『タベの祈り』で歌われてきた。ラテン語の讃歌の作詞者は不明。しかし、歌詞と旋律は古くから結びついて歌われてきた。旋律は教会旋法の第 4 旋法『ヒポ・フリギア調』で書かれている。教会第 3 旋法のフリギア調は、短音階の第 2 音が半音下がっていて悲劇的な音階であるのに対して、ヒポ・フリギア調は長音階的雰囲気を持つ。ヒポ・フリギア調は曲の終止が曖昧で、半終止（5 度上の和音で終止する）する印象を持つ。ボヘミア兄弟教会の教会音楽を担当していた M. ヴァイセ（M. Weibe, 1488~1534）の作詩で、1531 年に出版されたボヘミア兄弟団の最初の讃美歌集に収録されている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 3 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge には採用されていない。

讃美歌 21 228 番。(訳詞・高田重孝訳)

みどりごは生まれた、ベツレヘムに・Puer natus in Bethlehem ・BWV603

宗教改革以前、カトリック教会時代、会衆は聖歌隊がラテン語で讃歌・聖歌を歌った後に、会衆が『キリエ・エレイソン・Kyrieleison・主よ、憐れんでください』と応答して、聖歌の一部を応唱したりして典礼に参加していた。特に 1524 年以後の宗教改革後には、カトリック教会ラテン語聖歌が自国語のドイツ語に翻訳されて、会衆が聖歌隊に代わり、直接的に礼拝で讃美するように礼拝様式そのものが変わっていった。

宗教改革によって、今まで教会指導のミサであった教会行事が、より民衆のものになり、特に今まで聖歌隊が歌っていた単旋律聖歌等が翻訳されて、讃美歌として教会の中でも歌われるようになっていった。宗教改革の時期を境にして、ラテン語と自国語【ドイツ語】の混ざった讃美歌が生まれた。

原詩は中世以来の古い宗教詩であり、原曲は古いドイツのキャロルである。原詩は中世以来ドイツに伝えられているラテン語とドイツ語が混じり合った宗教詩で、中世カトリック教会公用語のラテン語から母国語への過渡期時代の姿のまま歌い継がれ定着していったと考えられる。原旋律も古く 1300 年代までさかのぼるドイツ民謡を基にしたキャロル。作詞者も作曲者も不明で、良い歌詞と良い旋律の調和の採れたものが結びついて、有名になり定着していった。

この歌の他に、ラテン語とドイツ語の混ざり合った歌で有名なのが BWV608『もろびと声あげ・In dulci jubilo』がある。

バッハが『オルガン小曲集』を作曲するために参考にした『ワイマール讃美歌集・1713 年刊行』では、ラテン語の歌詞とドイツ語の歌詞が交互に書かれている。この曲は 1535 年ヨーゼフ・クルーク (Joseph Klug) がウィッテンベルクで出版した Geistliche Lieder に初めて表れた。ドイツではクリスマスには必ず歌われる代表的な古いキャロルの名曲。

J・S・Bach 『教会カンタータ 65 番』

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版 【ドイツ語カトリック聖歌集】

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 302 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

讃えよ、主イエスを・Gelobet seist du ,Jesu Christ ・BWV604

原詩は単旋律聖歌の続唱 (セクエンシア・Sequentiae) 『Gretes nunc omnes reddamus・今、主に感謝をささげる』のラテン語からのドイツ語訳である。現在確認できる一番古い文献は、北ドイツ、リューネブル近郊にあるシトー派女子修道院が所蔵する手書きの聖務日課の時祷集であり、この時祷集は 1380 年に作成されている。当初は 1 節のみの聖歌であったが、カトリック教会で好まれて歌われているうちに歌詞が 5 節にまで付けられて歌われ続けられた。

宗教改革の時期に (1524 年以後) ルターによって更に手が加えられて、5 節の歌詞が 2 節増えて 7 節にまで拡大されて、現在の形に編纂された。

この讃美歌は 1524 年の出版当初からクリスマスの第 1 祝日（12 月 25 日）の主要な讃美歌のひとつであり、今日に至るまで歌われ続けている。旋律も当時の続唱（セクエンシア・Sequentiae）の旋律のままと言われている。旋律は教会第 7 旋法『ミクソ・リディア調』であり、ミクソ・リディア調は長旋法であり、音階の第 7 音が半音下がっている特徴を持つ旋法である。讃美歌の各節の最後に『キリエライス』が付いている。これらは『ライス』または『ライゼン』と呼ばれている。この起源は古く、カトリック教会の『リタニー・連祷』に由来している。司祭によって祈られる一連の連祷や、祈りや願いの後に、会衆が応答として『キリエ・エレイソン・Kyrie eleison。主よ憐れんでください』と繰り返して応答していた名残がそのまま讃美歌の中に定着していった。『Kyrie』と『eleison』の共通する母音『エ』がリエゾンして『キリエレイソン』になり、語尾の『on』が落ちて『ei』がドイツ語の発音で『アイ』に変わり『キリエライス』が生じて定着した。この『キリエライス』も宗教改革当初から礼拝の中に会衆が参加し始めたことを示す歴史的証拠である。

J・S・Bach『教会カンタータ 64 番、91 番』『クリスマスオラトリオ BWV248 第 7 曲、第 28 曲』

コラール編曲、697, 722, 723、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 23 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 107 ~ 110 番。

讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

全ての人、喜べ、主は生まれた・Der Tag, der ist so freudenreich・BWV605

原曲は 14 世紀のラテン語の讃歌『Dies est laetitiae・この喜ばしい日に』のドイツ語訳が原曲になっている。原曲は前の 2 つのラテン語の聖歌『みどりごは生まれた、ベツレヘムに・Puer natus in Bethlehem BWV603』『讃えよ、主イエスを・Gelobet seist du, Jesu Christ・BWV604』と同じく、『飼葉桶に眠る幼いみどりごイエス』を歌っている。歌詞と旋律は 1529 年に刊行された J, クルーク(Joseph, Klug)の讃美歌集に収録された。素朴な旋律も当時の単旋律聖歌に由来して、教会第 7 旋法『ミクソ・リディア調』で書かれている。

Evangelisches Kirchengesangbuch 1950 年版【ドイツ・プロテスタント教会讃美歌集】第 18 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 62 番。

讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606

『天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606』と『御使いの群れが、天よりあらわれ・Vom Himmel kam der Engel Schar・BWV607』は共に、野宿しながら羊の世話をしている羊飼いたちの前に、突如に現われた万軍の天使の群れの物語（ルカによる福音書第 2 章 8 ~ 20 節）を取り上げて主題としている。ルターはこの讃美歌を 1535 年のクリスマスに、自分の子供達への贈り物として作詞したと言われている。この頃から

クリスマスの行事が教会だけではなく、各家庭にも浸透して教会行事の祝い事として行われるようになってきた。宗教改革当時 1524 年以降、礼拝のための新しい讃美歌を作ることが、教会の急務のひとつであったが、現実的にはそれほど作曲ができる人物がルター派の中には多くいなかった。この問題の解決法としてルター派が現実的にしたことは、当時流行していた『流行歌』の旋律に合わせて、教会讃美歌を作詞して当てはめ『替え歌として讃美歌を作る手法』が用いられた。この讃美歌『天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606』も当時流行していた『私は見しらぬ国からやってきました・Ich komm' aus fremden Landen her』が元歌と言われている。

この讃美歌は歌詞が作られた 1535 年のクリスマス以後に出版され、クリスマス第 1 日の『タベの祈り』において歌われるようになり、後にはクリスマスの主要な讃美歌として定着した。バッハ自身、この讃美歌を好んで、他のオルガンのための編曲（BWV 700, 701, 738, 738a）に用いているし、クリスマス・オラトリオ BWV248、第 2 部第 17 曲、第 23 曲。マニフィカート BWV243a・初期稿にも採用している。

コラール編曲、700、701、738、738a,769,

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 24 番

J・S・Bach,389 Choralgrsange 323

讃美歌 21 246 番。讃美歌 101 番。ルーテル教会讃美歌 23 番。

バプテスト教会新生讃美歌 182 番。（訳詞・高田重孝訳）

御使いの群れが、天よりあらわれ・Vom Himmel kam der Engel Schar・BWV607

前曲『天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606』と同様、野宿しながら羊の世話をしている羊飼いたちの前に、突如に現われた万軍の天使の群れの物語（ルカによる福音書第 2 章 8～20 節）を取り上げて主題としている。ルターはこの讃美歌を 1535 年のクリスマスに、自分の子供達への贈り物として作詞したと言われている。

しかし、現在のドイツの讃美歌集には、この旋律を持つ讃美歌は採用されていない。また、バッハもこの旋律は『オルガン小曲集の中の、この BWV607』以外には用いていない。

イギリスの音楽学者 C,S,テリー（Charles Sanford Terry）は、この讃美歌『Vom Himmel kam der Engel ScharBWV607』の旋律は本来テノールに旋律が置かれていて、その曲のソプラノの声部が『Puer natus in Bethlehem BWV603』であると述べている。確かに両者は拍子も旋律も似ていて、同時演奏をすると、見事にハーモニーを奏でることが証明されている。

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版 【ドイツ語カトリック聖歌集】に収録されていた讃美歌。

J・S・Bach,389 Choralgrsange には採用されていない。

讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

もろびと声あげ・In dulci jubilo ・BWV608

原詩 中世以来の古い宗教詩 原曲 古いドイツのキャロル

原題 In dulci jubilo

原詩は中世以来ドイツに伝えられているラテン語とドイツ語が混じり合った宗教詩で、中世カトリック教会公用語のラテン語から母国語への過渡期時代の姿のまま歌い継がれ定着していったと考えられる。原旋律も古く 1300 年代までさかのぼるドイツ民謡を基にしたキャロル。

1535 年ヨーゼフ・クルーク (Joseph Klug) がウィッテンベルクで出版した Geistliche Lieder に初めて表れた。中世の祝祭日のダンスを伴う喜びのリズムが旋律の中に色濃く残り、宗教的民謡として教会の前の広場や家庭での集まりの際に踊りを伴い歌われていたことを、曲の華やかな明るさとダンスのリズムが明確に表している。ドイツではクリスマスには必ず歌われる代表的な古いキャロルの名曲。バッハは当初の計画通り『コラール前奏曲集』の 11 番、クリスマス・降誕祭に置いている。『コラール前奏曲集』では 10 番。

旋律は 3 拍子によって書かれ、揺れるようなリズムはベツレヘムの馬小屋で幼子イエスを揺らす時に歌う子守唄風に描かれている。バッハはソプラノの旋律に対して 1 小節遅れてテノールがカノン形式で模倣している。旋律に付き添って降下する 3 連符の対旋律もカノン形式で書かれている。アルトとバスの声部はオクターブの 2 重カノンを形成するように描かれている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 35 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 215 番。

讃美歌 21 247 番。讃美歌 102 番。ルーテル教会讃美歌 20 番。聖公会聖歌集 87 番。

バプテスト教会新生讃美歌 187 番。(歌詞・高田重孝訳)

神を褒め讃えよ、主なる神を・Lobt Gott,ihr Christen,allzugleich ・BWV609

歌詞・作曲共にニコラウス・ヘルマン (Nikolaus Herman 1500~1561) の讃美歌。ニコラウス・ヘルマンは宗教改革初期における重要な讃美歌作者のひとりだった。彼はドイツのニュールンベルク近郊のアルトドルフに生まれ、ボヘミア地方のヨアヒムスタールの学校教師になり、同時にカントール・音楽監督を務めた。地元の子供達のために、聖書の物語を題材にした讃美歌を作った。この讃美歌も 1560 年『お生まれになったイエスについてのヨアヒムスタールの子供達のための 3 つのクリスマスのための讃美歌』と題して発表された讃美歌のひとつである。子供が歌うための讃美歌のひとつであるために、調性も明るく軽い旋律を持ち、素朴で素直なクリスマスの喜びが褒め称えるように歌われている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 151 番、195 番』

コラール編曲、732。4 声コラール集 BWV 375,376,

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 27 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 233 ~ 236 番。

讃美歌 21 250 番。ルーテル教会讃美歌 19 番。バプテスト教会新生讃美歌 188 番。

(歌詞・高田重孝訳)

イエスは喜び・Jesu meine Freude・BWV610

作詞はヨハン・フランク（Johann Franck,1618~1677）。1653年に出版された讃美歌に収録された。美しい旋律はヨハン・クリューガー（Johann Crüger,1598~1662）の作曲。

ヨハン・クリューガーはベルリンの聖ニコライ教会の音楽監督・カントールを40年間務めた人物。1653年の作詞と同時に作曲され出版された。

1500年代の宗教改革期の讃美歌は教会の公同性を重んじ、個人的な宗教感情の表出を厳しく抑制した。宗教改革（1517年）より100年が経つと、教会の公同性よりも個人的な宗教感情表現が宗教詩として定着して、イエスへの愛を直接的に歌う『イエスの歌・Jesuslied』として、より会衆に親しまれ愛され好まれるようになった。その点でもこの讃美歌は1600年代の讃美歌の特徴を良く表わしている。バッハは当初の計画通り『コラール前奏曲集』の13番、クリスマス・降誕祭に置いている。『コラール前奏曲集』では12番。

バッハはこの旋律を主題として、葬式用の有名なモテット BWV227 を作曲している。カンタータ第64番第8曲 BWV64, カンタータ第87番第7曲 BWV87,等。オルガンのための編曲として、BWV713, 713a, 753、ノイマイスター・コラール集 BWV1105 がある。

1708年に出版された『ワイマール讃美歌集』では公現節第4主日の讃美歌と規定されているが、当時はクリスマスにも歌われていた。旋律は教会第1旋法『ドリア調』の調性を持ち、短調の旋法である。現在の第6音が半音上がったハ短調である。

J・S・Bach 『教会カンタータ 64番、81番』『モテット BWV227』

コラール編曲、713, 753, 1105. 4声コラール集 BWV358、

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第396番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 195~201番。

讃美歌 21 525番。ルーテル教会讃美歌 322番。バプテスト教会新生讃美歌 314番。

（歌詞・高田重孝訳）

主キリストを褒め称えよ・Christum wir sollen loben schon・BWV611

初期キリスト教会の讃美歌作家と言われている、C,セドゥリウス（Celius Sedulius,450年頃）の歌詞による有名な『キリスト讃歌』。セドゥリウスは、フランスかイタリア出身と言われている、ギリシャにも生んでいたと言われている。彼の作詞したラテン語の『キリスト讃歌・A solis ortus cardine・太陽の昇るところから』は有名な『キリスト讃歌』で、作曲されてから約1000年の間、中世を通して宗教改革の1500年代にまで、ラテン語のままカトリック教会で歌い継がれていた。宗教改革初期にセドゥリウスの有名な『キリスト讃歌』をルターが、ラテン語から自国語のドイツ語に翻訳して、当時のままの単旋律聖歌の旋律で、ルター派の讃美歌の中に取り込んでいった。このような手法は、初期の宗教改革の讃美歌創作期において良く採られた。カトリック教会から改宗したルター派の人たちが良く熟知している単旋律聖歌の旋律にラテン語の歌詞の内容をよりよく理解できるように、自国のドイツ語に変えて讃美した。この讃美歌は1524年には出版されて、クリスマス第2日（12月26日）の『夕べの祈りの時』で歌われ

るようになった。

J・S・Bach 『教会カンタータ 121 番』

コラール編曲、BWV696,

Evangelische Kirchengesangbuch【ドイツ・プロテスタント教会讃美歌集】第 403 番

* ラインランド、ウエストファーレン・リッペ地方版に収録されている。

J・S・Bach, 389 Choralgrsange には収録されていない。

讃美歌 21 には収録されていない。

(歌詞・高田重孝訳)

キリストを信じる喜び・Wir Christenleut habn jetzund Freud・BWV612

『オルガン小曲集』のアドヴェント（待降節）クリスマス（降誕祭）の項目の最後に置かれた讃美歌。作詞は C、フューガー（Caspar Fügler, 1521~1592）。彼は東部ドイツ、トルガウにあるザクセンの宮廷説教師を務めた後、ドレスデンの聖十字架教会の牧師になった。

『待降節・クリスマス』の項目を締めくくるに相応しい讃美歌で、キリストを信じる人々の喜びと救いの確信を歌い上げている。しかし、讃美歌の各行数は変則的で、他の讃美歌とは異なる音の数で構成されている。各行の言葉の音の数は、4・4・4・11、4・4・11、2 種類の言葉の韻数が採用されている。

旋律の作曲者は不明。おそらく当時歌われていたラテン語の聖歌（原曲は不明）にドイツ語の歌詞を当てはめたと考えられている。1593 年に出版された『ドレスデン讃美歌集』に収録されている。Weißenfels, 1714 年版に収録されている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 40 番、110 番』

コラール編曲、710, 1090,

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 379~381 番。

讃美歌 21 には収録されていない。(歌詞・高田重孝訳)

主を称えまつる、助けたまえ・Helfe mir Gotts Güte preisen・BWV613

紀元後 3 世紀までのキリスト教徒は 12 月 25 日をクリスマス・キリスト誕生の日として祝っていなかった。キリスト教徒は、4 世紀の初頭まで、後にキリスト教会の最も重要な祝日となるこの日・降誕祭【12 月 25 日】に、集まって礼拝を捧げることもなく、キリストの誕生を話題にすることもなく、他の日と変わりなく過ごしていた。同じ頃、まだキリスト教を受け入れていなかったローマ帝国においては、12 月 25 日は『太陽崇拝の特別な祝祭日・冬至の祭り』として盛大に祝われていた。キリストの誕生がこの日に祝われるようになる前は、東方教会においては、キリストの誕生は 1 月 6 日と考えられていた。キリストの降誕祭を特定の日と結びつけることは、当時の教会ではそれほど重要視されていなかった。

100 年後の 4 世紀後半、ローマ帝国がキリスト教を受け入れるに伴い、それまでローマで盛大に祝われていた『太陽崇拝の特別な祝祭日・冬至の祭り』がキリスト教の『義の太陽・キリス

ト』の出現を祝う祭りに置き換えられ、キリスト教会でも容認されて祝われるようになっていった。

この讃美歌、**主を称えまつる、助けたまえ・Helfe mir Gotts Gute preisen**の作詞者 P.エバー (Paul Eber, 1511~1569) の歌詞は、クリスマスの季節・短かった太陽に光が、冬至を境にその陽の長さを徐々に延ばしていき、輝きが増すことへの喜びと、過ぎ去った 1 年が神に守られた恵みを心から感謝して、幼子イエスに感謝の讃美を捧げる主題が歌われている。歌詞の内容からクリスマス後の日曜日、新年の讃美歌としてルター派では定着して歌われるようになった。作詞者 P.エバーは、南ドイツ、フランケンのキツィゲンに生まれ、ルターの宗教改革の協力者であった P.メランヒトン (Philipp Melanchiton, 1497~1560) の弟子であり友人でもあった。ヴィッテンベルク大学の言語学の教授、神学部の教授も務めた。この讃美歌の歌詞の各節の最初の文字、1 節の H、2 節の E、3 節の L、4 節の E、5 節の N、6 節の A、を綴ると『Helena』となり、エバーの娘の名前となる。当時流行っていた『文字遊び』が讃美歌の中に隠されている。この讃美歌は 1569 年に出版された。

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版 【ドイツ語カトリック聖歌集】に収録されていた讃美歌。

J・S・Bach 『教会カンタータ 28 番、16 番』

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 124~126 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

***参考文献** クリスマスの起源 O.クルマン著 教文館発行

古い年は過ぎ・Das alte Jahr vergangen is・BWV614

讃美歌の内容は『1 年の終わりを迎えて、過ぎ去った年を振り返り、神の加護を感謝して祈りを捧げ、来たる年も神からの豊かな恵みと導きを願い神の守りのうちに無事に過ごせることを願う』讃美歌である。

この讃美歌の成立過程は、一般の讃美歌の作曲とは違い、作者の異なる 2 つの旋律の前半と後半が繋ぎ合わされて、ひとつの讃美歌となっている。6 節からなる歌詞の第 1 節、第 2 節は作者が不明である。第 3 節以降を J.シュトイアライン (Johann Steuerlein, 1546~1613) が作詞して、讃美歌として全体が調和するようにまとめた。旋律もシュトイアラインが作曲して歌われていた。J.シュトイアラインはシュマルカルデンに生まれ、町の書記、官房秘書を務め、後にマイニンゲンの市長を務めた有能な人物であり、当時の桂冠詩人でもあり、オルガニストとしても有名だった。後にワイマールの音楽監督・カントールも務め、モテットや受難曲等、多くの作品も残している。

讃美歌の旋律の後半は、M, ヴルピウス (Melchiro Vulpus, 1570~1613) が作曲していた。

おそらく当時は J.シュトイアライン (Johann Steuerlein, 1546~1613) の讃美歌も M, ヴルピウス (Melchiro Vulpus, 1570~1613) の讃美歌も、独立した讃美歌として歌われていたが、W, ブリーゲル (Wolfgang Briegel, 1626~1712) が、2 つの讃美歌の前半と後半の印象的な旋

律を取って繋いでひとつの讃美歌に作り上げた。讃美歌の調性は自然的単調に近い教会旋法の『エオリア調』にまとめあげられていて、終わりは主和音ではなく属和音で終わる半終止がとられている。

ブリーゲルはフランケン地方のケーニヒスベルクに生まれ、シュヴァインフルト教会のオルガニスト、ゴータの宮廷楽長を務めた音楽家。1687 年に出版された『大讃美歌集』の編纂者としても有名である。

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版 【ドイツ語カトリック聖歌集】に収録されていた讃美歌。

J・S・Bach, 389 Choralgränge 55、56 番。

讃美歌 21 365 番。(訳詞・高田重孝訳)

喜びは主のうちに・In dir ist Freude・BWV615

この讃美歌の歌詞はヨハン・リンデマン (Johann Lindemann, 1550~1630) が編纂した讃美歌集『ラテン語ならびにドイツ語による愛らしいきわめて優美なクリスマスおよび新年のための 20 の小曲集』に収録されていたので、長い間リンデマンの作詞と考えられていた。しかし最近の研究で、キリアクス・シュニーガス (Cyriacus Schneegaß, 1546~1597) の作詞と分かった。

シュニーガスは中部ドイツ、ゴータ近郊、ブフレーベンに生まれ、メランヒトンの愛顧を受けた神学者であり、宗教音楽家ニコラウス・ゼルネッカー (Nikolaus Selnecker, 1530~1592) の弟子でチューリンゲン地方の各地の教会の牧師を務めた。

讃美歌の旋律に使われている曲は、イタリアの作曲家 G.G.ガストルディ (Giovanni Giacomo Gastoldi, 1556~1622) が 1591 年に出版した世俗的な舞踏曲集『パレット』【5 声部の合唱曲 / Balletto L'innamorato・求婚者の踊りの歌】から採用されている。ガストルディはイタリア、ロンバルディア地方のカラヴァジョに生まれ、マントゥヴァの宮廷歌手、宮廷楽長を務め、後にミラノ大聖堂の楽長、音楽監督になった。当時、ガストルディの『パレット』は良く知られた舞踏曲で、『イタリアのマドリガル』と共に民衆に好まれて歌われていた。旋律に使われている舞踏曲は軽やかなリズムを持ち、明るく華やかな雰囲気を持っている。原曲には繰り返し部分に『ファーラ、ラーララ』の囃し言葉がついていたが、讃美歌に転用するにあたって、さすがにその部分は使われていない。

旋律は 1609 年に出版された D,シュパイザー (D.Speiser) の讃美歌集に収録されていて、1646 年にシュニーガスの歌詞と結び合わされて、それ以来、会衆に愛唱される讃美歌になった。

中世の祝祭日のダンスを伴う喜びのリズムが旋律の中に色濃く残り、宗教的民謡として教会の前の広場や家庭での集まりの際に踊りを伴い歌われていたことを、曲の華やかな明るさとダンスのリズムが明確に表している。ドイツではクリスマスと新年には必ず歌われる代表的な古いキャロルの名曲。旋律は 3 拍子によって書かれ、揺れるようなリズムは中世の祝祭日のダンスを伴う喜びを表し、喜びを高らかに謳歌している。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 398 番
J・S・Bach, 389 Choralgränge には採用されていない。
讃美歌 21 249 番。（歌詞・高田重孝訳）

平安と安らぎ、御言葉のとおりに・Mit Fried und Freud ich fahr dahin・BWV616

『主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりに、この僕（しもべ）を安らか平安と安らぎ、御言葉のとおりに去らせてくださいます。わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民の前にお備えになったもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光であります。』（ルカによる福音書 2 章 28～32 節）

この讃美歌の歌詞になっているのは有名な『シメオンの讃歌・Nunc dimittis』と呼ばれる聖句のルターによるドイツ語訳の 4 節の歌詞である。1524 年にヴィッテンベルクで出版された讃美歌集に収められている。歌詞はラテン語からドイツ語へルター自身が翻訳して 4 節の讃美歌の歌詞とした。

旋律は出版された当初からの旋律で、ルターを音楽の面で助けたプロテスタントの初代のカントール・音楽監督のヨハン・ヴァルター（Johann Walter, 1496～1570）が作曲した。

旋律の特徴として、冒頭に 5 度の上行の跳躍が 2 回現われ順次降下する。また、第 4、第 5 フレーズにも、同様の 5 度の上行跳躍の後に静かに降下する展開が繰り返されている。

旋律は教会第 1 旋法『ドリア調』で書かれ、質実剛健な『シメオンの信仰の告白』に相応しい旋律である。

『シメオンの讃歌』の言葉の意味と内容から葬儀にも採用され、『死と永遠』の項目に分類している讃美歌集もあり、また、カトリック教会では公現節の期節の終わりの主日、2 月 2 日の『マリア潔めの日』にしている讃美歌もある。

『シメオンの讃歌』の意味は、イエスの誕生を待ち続けたシメオンに伝えられた救いの喜びの予言にある。シメオンは聖霊により『主が遣わすメシア（救い主）に会うまでは決して死ぬことはない』との予言を受けていた。シメオンにとってイエスと出会うことは、この世の終わり、自分の死を意味していた。シメオンは幼子イエスを見つけて腕に抱き、そして神を讃えて『主よ、今こそ、あなたは、御言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たのですから。』と語る。この時、シメオンは神の救いを見て、神の救いを自分の腕の中に確認した。イエスとの出会いは救いであり喜びである。これは目の前に迫っている肉体の死を越えさせる喜びでもある。神のもたらす救いとは、死を越えて働く力であり、肉体の死を越えた先にある永遠の命が示された喜びである。だからこそシメオンは死に際して、心に安らかさと平安が与えられた。さらに神の救いはシメオンのようにイエスと直接に出会った者だけに与えられる喜びではなく『この救はあなたが万民の前にお備えになったもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光であります。』と全人類に与えられ救いを語っている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 83 番、95 番、106 番、125 番』

4 声コラール集 BWV382、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 519 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 249 ~ 251 番。

バプテスト教会新生讃美歌 144 番。讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

神よ、天の扉、開きたまえ・Herr Gott, nun schließ den Himmel auf・BWV617

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版【ドイツ語カトリック聖歌集】に収録されていた讃美歌には『シメオンの讃歌』に基づく讃美歌の編曲が 2 曲収録されている。

しかし、現在のドイツプロテスタントの讃美歌集にはどの版もこの曲を収録していない。

BWB617 の作詞者 T.キール (Tobias Kiel, 1584~1626) はゴータ近郊のバルシュタットに生まれ、教師と牧師を務めた。

旋律は M, アンテンベルク (Michael Altenberg, 1584~1640) の作曲。

J・S・Bach, 389 Choralgrsange には採用されていない。

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

神の小羊、十字架に架かり・O Lamm Gottes, unschuldig・BWV618

この讃美歌の作詞・作曲者はニコラウス・デツィウス (Nikolaus Decius, 1490 ~ 1541)。

デツィウスは南部ドイツ、フランケン地方のホーフに生まれ、後に修道士になった。その後、女子修道院長を務めたが、1522 年、ルターの宗教改革に同調してプロテスタントに転向した。この讃美歌はデツィウスがプロテスタントへの改宗後に作られた。カトリック教会のミサの通常文から『グローリア・Gloria, サンクトゥス・Sanctus, アニウス・デイ・Agnus Dei』の 3 曲をラテン語からドイツ語に訳した。ルターよりも早期にカトリック教会のミサの通常文をラテン語からドイツ語に訳す試みを行って、宗教改革に伴う音楽の脆弱さを、既存のカトリック教会の音楽でもって補う試みを行っている。この旋律は中世の単旋律聖歌に基づき、デツィウスが作曲したと言われている。ラテン語の『アニウス・デイ・Agnus Dei』の歌詞は『世の罪を取り除く神の小羊、私たちが憐れんでください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, miserere nobis』を 2 度繰り返し、3 節目に『世の罪を取り除く神の小羊。私たちに平和を与えてください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona nobis pacem』と唱える祈りである。デツィウスはこの原文にプロテスタント的な解釈を加えて、イエスの十字架の上での死、苦しみと忍耐、十字架による個人の魂の救済を加えた。カトリック教会では、司祭が全てを執り成し、聖母マリア、諸聖人、キリストへ執り成しを願うことが教理として教えられていたが、それらといった教会を通しての執り成しを否定したプロテスタント教会では、神に個人が直接に願い、神から罪の許しを頂くことができるようになった。

『マタイ受難曲 BWV244, 第 1 曲』

コラール編曲、1085, 1095。4 声コラール集 BWV401、

『ライプツヒ・コラール集 BWV656』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 190 - 1 番
J・S・Bach, 389 Choralgrsange 285 番。

讃美歌 21 87 番。讃美歌 257 番。ルーテル教会讃美歌 234 番。聖公会聖歌集 372 番。
バプテスト教会新生讃美歌 226 番。(歌詞・高田重孝訳)

神の小羊、世の罪を荷う・Christe, du Lamm Gottes・BWV619

ルターは 1525 年、ヴィッテンベルク教会で初めてドイツ語によるミサを行った。その時の礼拝順序を、ルター派の教会指針とするために、翌年 1526 年『ドイツ語によるミサと礼拝順序』として出版した。その中に『ドイツ語でアニウス・デイを歌う』と指示してある。ルターがラテン語のミサの通常文の『アニウス・デイ』をドイツ語に翻訳して、旋律を付けた曲がこの曲だと言われている。旋律は 1528 年にブラウンシュヴァイクで出版された『礼拝式文』に収録された。しかし最近の研究の結果、グレゴリオ聖歌の『使徒の祝日のためのミサ曲』第 6 番の旋律がラテン語からドイツ語の歌詞化に伴い簡略化されたことが判明している。

J・S・Bach『教会カンタータ 23 番、第 2 曲、第 4 曲』『ヨハネ受難曲、BWV245, 第 40 曲』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 190 - 2 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange には採用されていない。

讃美歌 21 86 番。(歌詞・高田重孝訳)

救いの主は、罪も犯さず・Christus, der uns selig macht・BWV620

作詞者はボヘミア兄弟教会の教会音楽を担当していた M, ヴァイセ (M, Weibe, 1488~1534) の作詩で、ヴァイセは 14 世紀のラテン語のイエスの受難の詩『Patris sapientia, veritas divina・父の知恵、真実の神』をドイツ語に翻訳して 1531 年に出版されたボヘミア兄弟団の最初の讃美歌集に収録されている。ラテン語からチェコ語に、更にチェコ語からドイツ語に翻訳した。この讃美歌は修道院で行われる聖務日課にあわせて、1 節は真夜中に、2 節は朝の 6 時に、3 節は朝の 9 時に、4 節は昼の 12 時に、5 節は午後の 3 時に、6 節は夕べに、7 節は一日の終わりに、と時間を追いながらキリストの受難の出来事をたどり黙想するための曲だった。

『ヨハネ受難曲 BWV245, 第 15 曲、第 37 曲』

コラール編曲、BWV283,

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 77 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 48~50 番。

讃美歌 21 293 番。(訳詞・高田重孝訳)

十字架に架かりて、イエスは傷つかれ・Da Jesus an dem Kreuze stund・BWV621

讃美歌の歌詞は、初め 1515 年に J, ベッセンシュタイン (Johann Böschenstein) により作詞され、100 年後の 1617 年に、V. シュムック (Vincent Schmuck) により手が加えられた。

この讃美歌は 9 節からなり、8 節まで各節ごとに十字架の上でイエスが語られた 7 つの言葉とその省察、9 節では『イエスを常に敬い、7 つの言葉に思いを馳せる人を、神は顧み、イエスの死により、永遠の命が与えられる』と締め括られている。

旋律の作者と出典先は明確ではないが、15 世紀の単旋律聖歌『Stabat ad lignum cruces・十字架の側に立ち給う』を模倣した旋律ではないかと推測されている。17 世紀の終わりころまでこの歌詞と旋律の組み合わせで歌われていた記録が残されている。

現在のドイツプロテスタント教会讃美歌には採用されていないが、ドイツ・オーストリアのカトリック教会讃美歌集、『Gotteslob・神を讃美』には、キリスト受難の讃美歌として収録されていて、受難週の聖金曜日の讃美歌として歌われている。旋律もキリストの受難の悲しみを表わすに相応しい、教会旋法の中でも最も悲痛な音階『フリギア旋法』(教会第 3 旋法)で書かれている。『フリギア調』は音階の E 音からオクターブ上の E 音の短調の旋法で、特に第 1 音と第 2 音の間隔が短 2 度を特徴とする。この旋律を用いているオルガン曲が北ドイツの作曲家にはあまりいなくて、南ドイツの作曲家、フィッシャー、パッフェルベル等の作品に多く見られる。北ドイツと南ドイツの典礼の違いが聖金曜日の讃美歌の扱いにも表れている。

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版【ドイツ語カトリック聖歌集】
187 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange には採用されていない。

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

人よ、汝が罪の大いなるを嘆き、涙を流せ・O Mensch, beweine deine Sünde groß・BWV622

讃美歌としては最も長い旋律を持つ名曲である。音楽形式としてはパール形式によって、3 つのフレーズが 2 回繰り返されるシュトレン(Stollen)と、6 つのフレーズのアブゲザンク(Abgesang)による 12 のフレーズから構成されている。原詩は 24 節からなる長大の数の節を持ち、節の数からいうと、讃美歌史上最大の節数を持つ讃美歌である。名曲であるがゆえにどの讃美歌にも掲載されているが、現代の讃美歌では、讃美歌の原曲の第 1 節と最終節 24 節のみを掲載する讃美歌がほとんどである。

作詞は S,ハイデン(Sebald Heyden, 1499~1561)の宗教詩に基づいている。『おお、人よ、あなたの大きな罪の大きさを嘆きなさい』と、感嘆詞で始まるこの宗教詩は、聖金曜日の十字架の道行きの時に、悲しみ嘆いてやまない女たちに向かってキリストが語った言葉に触発されて作詞をした。『エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろあなたがた自身のため、また自分の子供達のために泣くがよい。』(ルカによる福音書 23 章 28 節)

第 1 節では『キリスト讃歌』と言われる『キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕(しもべ)のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様はひとと異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。』(ピリピ人への手紙 2 章 6~8 節)

讃美歌の第 1 節で、神と人との間を執り成す『仲介者としてのキリスト』の役割が歌われてい

て、プロテスタント信仰の中心主題が明確な言葉で示されて歌われている。

2 節から 23 節までは、受難の告知。ベタニアでの塗油、ユダの裏切り、最後の晚餐から十字架の道行き、十字架の上での七つの言葉とイエスの苦しみと死、埋葬までが、順を追って追想され歌われている。最終節 24 節は『キリストの受難の物語の意味、キリストは人の罪を背負って死んでくださった』と、神に感謝を持って締め括っている。

作詞者 S,ハイデン (Sebald Heyden,1499~1561) は、南ドイツ、エルランゲン近郊のブルックに生まれ、ニュルンベルクの看護学校の合唱長や校長を務め、後に同じ町のセバルドゥス教会付属学校の学長も務めた。

旋律の作者は M,グライター (Matthäus Greiter,1490?~1550) で、1525 年にシュトラスブルで出版された讃美歌集に、詩編 36 編のドイツ語訳『Es sind doch selig alle・罪は悪者の心の中に語りかける』のためにこの旋律を付けた。

M,グライターはアウグスブルク近郊のアイヒャッハに生まれ、ドミニコ会の修道士になり、シュトラスブル大聖堂の音楽監督・カントールを務めていたが、友人のダッハシュタインの影響により改宗して修道院を去り、プロテスタントの助説教師を務めた。シュトラスブルの改革派教会の音楽上の協力者となり、プロテスタントの初期の讃美歌の旋律や典礼音楽の作曲者として大きな力となった。この讃美歌の旋律は、J,カルヴァンが詩編 36 編を模倣したフランス語の詩編歌にも用いられている。

4 声コラール集 BWV402、

『マタイ受難曲 BWV244,第 29 曲』『ヨハネ受難曲 BWV245,第 1 曲』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 76 番

J・S・Bach,389 Choralgrsange 286、287 番。

讃美歌 21 294 番。(訳詞・高田重孝訳)

J・S・Bach 『教会カンタータ 感謝します、我が主よ・Wir danken dir, Herr Jesu Christ,daß du für uns gestorben bist・BWV623

この讃美歌は『主の受難の瞑想』の後のキリスト教徒の感謝と祈りが主題となっている。

宗教改革創立当時の讃美歌は、カトリック教会からの独立を示すために、教会共同体の存在を示す教義的讃美歌が多く作られていたが、およそ 100 年後、ルター派の存在が確立されて、安定期に入ってからキリスト教を教義的にとらえるのではなく、個人の宗教としてとらえ始めるようになり、それに伴って、神に対しての個人の信仰の告白的、讃美歌が多く作られるようになり、個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった。

作詞の C,フィッシャー (Christoph Fischer,1518~1597) はボヘミヤ地方のヨアヒムスタールに生まれ、シュマルカルデンのヘンネンベルク侯爵領で宗教改革を推進して、中部ドイツの各地の教会牧師を務めた。最後はニーダー・ザクセンのツェレの教会監督を務めた。

旋律の作曲者は J,エッカルト (Johann Eccard,1553~1611) ,テューリンゲンのミュールハウゼンに生まれている。

Gotteslob Kathorisches Gebet-und Gesangbuch 1715 年版 【ドイツ語カトリック聖歌集】
J・S・Bach,389 Choralgrsange には採用されていない。
讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

神よ、助けを与えたまえ・Hilf,Gott, daß mir's gelinge ・BWV624

現在、この讃美歌はドイツでは歌われていない。歌詞は 1527 年に出版されたツュトフェンの H,ミュラー（Heinrich Müller von Zütphen,生没年不詳）の『受難のバラード』から採られ、宗教改革初期の讃美歌集には採用されていた。原詩は 13 節からなり、各節の最初の文字を連ねると詩人の名前になる、当時流行っていた『文字遊び』が織り込まれている。H,ミュラーはプロテスタント信仰のためにカトリック教会から火刑に処せられた牧師となった。

この讃美歌の旋律は当時人気のあった宮廷の歌であったと言われている。教会第 1 旋法『ドリア調』であるが、優しさを持った旋律である。原曲は 2 分の 2 拍子で書かれているが、バッハは 3 拍子に書き換えてより優雅さを讃美歌に与えて、舞踏的要素の中に、神のもとで安らぐ人々が神を褒め称える喜びを歌っている。

Weißenfels 1714 年版に掲載されている。

J・S・Bach,389 Choralgrsange 172 番。

讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

主は死にたまえり、我が罪のため・Christ lag in Todesbanden ・BWV625

この讃美歌『主は死にたまえり、我が罪のため・Christ lag in Todesbanden ・BWV625』と『主は甦り・Christ ist erstanden ・BWV627』、2 つの讃美歌の原曲は、グレゴリオ聖歌の復活祭の続唱・Sequentiae『我らの過ぎ越し・Victimae Paschali laudes』である。

キリストは自らの復活によって罪と死に対して真の勝利を得た。復活祭の意義はキリスト信者達が心を合わせて、キリストが死に勝利した喜びを祝うことにある。キリストの復活はすべての信者の心に死を克服する喜びと希望を与え、信仰と希望の基になっている。復活祭は降誕祭（クリスマス）と共に、キリスト教のすべての祝日の中で最も大きな中心的祝祭である。

『我らの過ぎ越し』は復活祭の続唱としてグレゴリオ聖歌の中で最も有名な曲であり、旋律は歌詞に対して音律的かつ美しく流れていく。その旋律のなだらかで優美な動きは非常に美しく復活祭の意義を高らかに歌い上げて印象的である。旋律は教会旋法第 1 旋法『ドリア調』に基づいている。アレルヤ唱の最後の音符に付けられた長大なメリスマから発展した続唱は、中世には広く愛好され数多くの名曲が生まれたと言われている。しかし 1545～63 年のトレント公会議において、典礼にふさわしくないとして多くが禁止された。『我らの過ぎ越し』『来れ聖霊』（Veni Sancte Spiritus・聖霊降臨祭続唱）『シオンを讃えよ』（Lauda Sion・キリストの御聖体祝日の続唱）と共に 5 曲のみが典礼用に認められ残された。『我らの過ぎ越し』はブルゴーニュのヴィーボ（？～1048 年没）作曲の古い復活祭のための続唱。グレゴリオ聖歌中、最も美しく有名な曲。

マルチン・ルター（Martin Luther 1483～1546年）は、この続唱の歌詞を基に歌詞を7節に拡大して讃美歌を書いている。旋律もグレゴリオ聖歌の *Sequentiae*『**我らの過ぎ越し・Victimae Paschali laudes**』と比べると、確かに旋律の雰囲気は似ているが、新しく創作されたのではないかと思うほど旋律に変更が加えられている。原曲に比べると、旋律がドイツ語の歌詞化に伴い簡略化されている。このルターの編曲した讃美歌は、パンフレットの形で流布した後、1524年の刊行されたプロテスタントの最初の2種類の讃美歌集に収録された。力強いドリア調で書かれている讃美歌はルターの復活祭に対する強い思いと信念が表れている。

J・S・バッハ（Johann Sebastian Bach 1685～1750年）は、ルターのこの復活祭のための讃美歌の全7節すべての歌詞に、1708年このルターの旋律を主題にして復活祭のための有名なカンタータ4番（BWV 4）を作曲している。

J・S・Bach 『教会カンタータ 4番、158番』

コラール編曲、695、718。 4声コラール集 BWV277～279.

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第101番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 38～41番。

讃美歌 21 317番。 ルーテル教会讃美歌 97番。 バプテスト教会新生讃美歌 238番。

原曲・Graduale Triplex・グラドゥアーレ・トリプレクス、ソレム出版1979年版 780頁
（訳詞・高田重孝訳）

主は救い主、よみがえりて・Jesus Christus, unser Heiland, der den Tod überwand・BWV626

この讃美歌の原詩は、グレゴリオ聖歌の聖餐の讃歌『Jesus Christus nostra salus・イエス・キリストは我らの救い』である。旋律はルターの宗教改革の時に音楽の改革者でもあったJ、ヴァルター（Johann Walter, 1496～1570）の作曲と言われている。ヴァルターはプロテスタント教会の最初の音楽監督・カントールとしてルターの宗教改革を音楽の面で支えた。

原詩にはない『キリエ・エレイソン・Kyrie eleison・主よ、憐れんでください』が讃美歌の最後に付けられ会衆が参与できるように配慮されている。

キリスト教最大の祭典としての復活祭の讃美歌は、死に勝利して復活したキリストを称える喜びに満ちた音楽が大半を占めるが、心静かにキリストの復活の意味を省察する讃美歌も少ないが存在する。この讃美歌の旋律は教会旋法の『エオリア調』で書かれているので、控えめで内面的な讃美歌となっている。

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第102番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 207番。

讃美歌 21 には採用されていない。（訳詞・高田重孝訳）

主はよみがえり・Christus ist erstanden・BWV627

この讃美歌『主は甦り・Christ ist erstanden・BWV627』と『主は死にたまえり、我が罪のため・Christ lag in Todesbanden・BWV625』、この2つの讃美歌の原曲は、グレゴリオ聖歌の

復活祭の続唱・Sequentiae『我らの過ぎ越し・Victimae Paschali laudes』である。

中世の時代、復活祭のミサの中で復活祭の続唱・Sequentiae『我らの過ぎ越し・Victimae Paschali laudes』の後で、この讃美歌がドイツ語で続いて歌われていた。教会初期の時代から礼拝や典礼における会衆参与の例である。歌詞も旋律もオーストリアやドイツ南部のバイエルン地方に起源を持ち、当時の記録から12世紀までさかのぼることができる。

ボヘミア兄弟教会の教会音楽を担当していた M,ヴァイセ (M,Weibe,1488~1534) の作詩で、ヴァイセは14世紀のラテン語のイエスの受難の詩『Patris sapientia, veritas divina・父の知恵、真実の神』をドイツ語に翻訳して1531年に出版されたボヘミア兄弟団の最初の讃美歌集に収録されている。ラテン語からチェコ語に、更にチェコ語からドイツ語に翻訳した。

旋律は復活祭の続唱・Sequentiae『我らの過ぎ越し・Victimae Paschali laudes』とほぼ同じような旋律で、各節の最後に『主よ、憐れみたまえ・キリエ・エレイソン・Kyrie eleison』の変形であるドイツ語の『キリエライス』が挿入されている。中世の時代、会衆が参与した讃美歌の原型・教会会衆歌のもっとも古い形である。ドイツでは復活祭から昇天祭まで歌われる。

ドイツにおける最も古いキリスト教最大の復活祭讃歌である。

J・S・Bach 『教会カンタータ 66 番』

4声コラール集 BWV 276 .

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 99 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 36 番。

讃美歌 21 316 番。ルーテル教会讃美歌 103 番。聖公会聖歌集 180 番。

バプテスト教会新生讃美歌 239 番。

(訳詞・高田重孝訳)

主はよみがえられ・Erstanden ist der heilige Christ・BWV628

ラテン語の復活祭のためのキャロル『キリストは今日復活された・Surrexit Christus hodie』をドイツ語に訳した復活祭のためのキャロルである。

ボヘミア兄弟教会の教会音楽を担当していた M,ヴァイセ (M,Weibe,1488~1534) の作詩と思われる。ヴァイセは14世紀のラテン語のイエスの受難の詩『Patris sapientia, veritas divina・父の知恵、真実の神』をドイツ語に翻訳して1531年に出版されたボヘミア兄弟団の最初の讃美歌集に収録されている。ラテン語からチェコ語に、更にチェコ語からドイツ語に翻訳した。この讃美歌も M,ヴァイセの編集した1531年の讃美歌集にこの旋律が収録されている。

原詩は17節あり、各節の役柄から、中世時代、教会の前庭で復活祭に行われていた『復活劇』の歌詞であることが判る。1, 2 節の復活日の早朝までの解説に続き、3 節の『だれが私たちのために墓の入口から石を転がしてくれるのでしょうか?』の婦人たちの会話の後、4, 5 節は『福音記者』、6, 7 節は『墓を訪ねた婦人たち』、8 節は『天使の言葉』、9 節からは『婦人たち』と『天使』の対話が続く、16 節は『福音記者』、17 節は『全員での合唱』で復活劇が構成されている。

各節の第 2 小節、第 4 小節では『ハレルヤ』の喜びが挿入されていて、復活劇に会衆の参加と高揚する喜びが表現されている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 105 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 85 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

輝く日、来りて・Erschienen ist der herrliche Tag・BWV629

(神を褒め讃えよ、主なる神を・Lobt Gott,ihr Christen,allzugleich・BWV609)

この 2 つの讃美歌は、歌詞・作曲共にニコラウス ヘルマン (Nikolaus Herman 1500~1561) の讃美歌。N, ヘルマンは宗教改革初期における重要な讃美歌作者のひとりだった。彼はドイツのニュールンベルク近郊のアルトドルフに生まれ、ボヘミア地方のヨアヒムスタールの学校教師になり、同時にカントール・音楽監督を務めた。地元の子供達のために、聖書の物語を題材にした讃美歌を作った。クリスマスのための讃美歌も 1560 年『お生まれになったイエスについてのヨアヒムスタールの子供達のための 3 つのクリスマスのための讃美歌 (BWV609 を参照)』と題して発表された讃美歌のひとつである。子供が歌うための讃美歌のひとつであるために、調性も明るく軽い旋律を持ち、素朴で素直なクリスマスの喜びが褒め称えるように歌われている。

復活祭のためにも同様に『ヨアヒムスタールの少女学校の子供達のための救い主イエス・キリストの喜ばしい復活についての新しい賛美歌』と題して発表された讃美歌のひとつである。

原詩は 14 節からなり、キャロルのスタイルで『復活の物語』を歌っている。比較的早い 3 拍子の舞踏風な旋律に特徴がある。旋律は歌詞に相応しい教会第 1 旋法『ドリア調』を主体としている。

ライプツィヒでは、復活祭の主日を含めて 3 日間が復活祭の祝日として祝われ、この讃美歌は、第 2、第 3 祝日に歌われたばかりでなく、復活祭後の第 1 主日・Quasimodogeniti の主日にも歌われた。主日の意味はペテロ第 1 の手紙、2 章 2 節『今生まれた乳飲み子のように混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである。』

この讃美歌は 1713 年刊行の『ワイマール讃美歌集』では、各節ラテン語とドイツ語が併記されている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 67 番、145 番』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 106 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 83、84 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

神の御子はきたり、死よりよみがえりて・Heut triumphieret Gottes Sohn・BWV630

この讃美歌は、復活祭の喜びを舞踏風な 3 拍子で表していて、中間と終わりに『ハレルヤ』の喜びの挿入句が入り、より讃美歌を復活祭に相応しく舞踏の喜びで華やかに盛り上げている。

ライブツィヒでは復活祭の基節から昇天日にも歌われていた。

作詞の K,シュトルツハーゲン (Kapar Stolzhausen,1550~1594) はベルリン近郊のベルナウに生まれ、シュテンダルのギムナジウムの校長と牧師を務め、後に現在のチェコ、メーレン地方のイグラウでドイツ教会の監督も務めた。宗教出版物の普及の印刷所を始めたことでも知られている。

作曲の、B, ゲジウス (Bartholomäus Gesius,1562 頃 ~ 1613) はドイツの東、オーダー河沿いのフランクフルトに生まれ、神学を学び、音楽家としてシュレージエンのグロガウでシェナイヒ男爵に仕えた。また、オーダー河沿いのフランクフルトの聖マリア教会のカントール・音楽監督も務めた。数多くの讃美歌を作曲したことで知られるが、特に、従来、多声楽曲ではテノールに旋律が置かれていたが、旋律をソプラノに置く『カンツィオナール』と呼ばれるスタイルを確立して、この種の編曲を多く残している。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 109 番

J・S・Bach,389 Choralgrsange 171 番。

讃美歌 21 319 番。(歌詞・高田重孝訳)

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm,Gott Schöpfer, Heiliger Geist・BWV631

聖霊来りたまえ (Veni Creator Spiritus・原曲 グレゴリオ聖歌)

『来たれ聖霊』とともにグレゴリオ聖歌の聖霊讃歌の中で最も古い讃歌。850 年頃から歌われ始めた古い歴史と伝統を持っている。作者は確定的ではないがラバヌス・マウルス Rabanus Maurus (776 頃 ~ 856) ドイツ・マインツの大司教と推定されている。マウルスはドイツ、マインツの生まれ、ベネディクト会修道院に入り、修道院の教師となり、後に院長を務めた。仁徳の人で、マインツの大司教を務めた。彼の名、マウルスは聖ベネディクトの弟子である聖マウルに由来している。マウルスはドイツ教育制度の創始者として知られ詩人としても有名であるが詩歌は少なく、この歌がカトリック教会において占めた地位は Te Deum に次ぎ中世においては特に威儀を整え、鐘、香、灯明等と共に歌われた。

旋律は本来、アンブロシウス聖歌の中の、復活祭の讃歌『今日は神の作られた日・Hicest diesversus Dei』につけられていたものが、転用されてこの歌詞と結びついて歌われたと推測されている。

10 世紀後半から歌われ始めた単旋律聖歌である。聖霊降臨祭の『夕べの祈り』や『第 3 時課・使徒たちが聖霊を受けた時間にあたる午前 9 時に行われる聖務日課』に歌われ始めた。

11 世紀からは聖職者任職式等、教会会議、戴冠式、聖別式等、教会の最も厳粛な式典・ミサに於いて用いられるようになった。単純な 3 節の有節形式による讃歌で、旋律も平易で暗記しやすく、当時の一般信徒達によって広く愛唱されていたと推測される。教会第 8 旋法『ヒボミキソ・リディア調』による。ヒボミキソ・リディア調は第 7 音が半音下がった教会旋法である。

日本においては『**サクラメント堤要**』1605 年（慶長 10 年）『長崎イエズス会の日本のコレジオにて』発行された『教会の秘跡を授けるための手引き』に掲載されている。本の目的は『その管轄下にある司祭用に』と明記されている。日本で初めて 2 色刷りによって 19 曲のグレゴリオ聖歌が印刷された。我が国最初の印刷楽譜であるこのサクラメント堤要には、葬儀のための聖歌 13 曲と司教の管区教会訪問の時のための聖歌 6 曲が印刷されている。**聖霊来りたまえ（Veni Creator Spiritus）**は、司教が公に教会を訪問する時の儀式のための 6 つの聖歌の第 4 曲目、全曲の第 17 曲目に印刷されて、日本のキリシタンたちにも広く知られ愛唱されていた。1524 年、ドイツ、エルフルトで出版されたプロテスタントの最初の讃美歌集にもこの旋律と歌詞が採用されているが、原曲に比べると、旋律がドイツ語の歌詞化に伴い簡略化されている。Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 126 番 J・S・Bach, 389 Choralgränge 218、219 番。讃美歌 21 339 番。ルーテル教会讃美歌 120 番。原曲・Graduale Triplex・グラドゥアーレ・トリプレクス、ソレム出版 1979 年 885～886 頁（歌詞・高田重孝訳）

我が主よ、御顔を我に向けたまえ・Herr Jesu Christ, dich zu uns wend・BWV632

作曲者は、ザクセン・ワイマール候ヴィルヘルム 2 世（Wilhelm von Sachsen-Weimar, 1598～1662）。ヴィルヘルム 2 世は、アルテンベルク城に生まれ、イエナ大学で音楽と数学を学び、30 年戦争の際、チューリンゲン地方のスエーデンの総督になり、2 度も瀕死の重傷を負った。戦争終結後は音楽と作詞に専念して、詩人の会『豊かに実を結ぶ協会・Furchtbringende Gesellschaft』の会長を務めた。

旋律の作曲者は不明。ゴックスハイムで 1628 年に出版された讃美歌集に、この歌詞と共に採用されている。旋律はボヘミヤの宗教改革者 J, フス（Jan Hus, 1370?～1415）の時代にまでさかのぼると言われている。この讃美歌は牧師が説教台に登壇するときに、また説教前の讃美歌としてライブツィヒでは毎週歌われていた。カルヴァンの改革派の礼拝に用いられる『神の助けを呼び求める祈り』（詩編 124 篇 8 節）とも歌詞が合致している。原曲の旋律は、歌詞の韻に合うように 2 拍子と 3 拍子の混合した変拍子のリズムによって作られているが、200 年後、バッハは 4 拍子へと音価を平均させた旋律に変えている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 155 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 139 番。

讃美歌 21 1 番。ルーテル教会讃美歌 191 番。聖公会聖歌集 326 番。

バプテスト教会新生讃美歌 573 番。（歌詞・高田重孝訳）

愛するイエスよ・Liebster Jesu, wir sind hier BWV634(初期稿)、633

『説教の前に使用するために』との原題を持つ祈りの讃美歌『愛するイエスよ』。

バッハは当初の『コラール前奏曲集』の 50 番、『説教の前に』の中に組み込む計画でいたが、

実際は『コラール小曲集』の 35 番に置き換えている。

作詞は T. クラウスニツァー (Tobias Clausnitzer, 1619~84) の宗教詩。彼はザクセン州、エルツビルゲのトゥームに生まれ、30 年戦争の際、スウェーデン軍の従軍牧師として従軍。その後プファルツのヴァイデンで牧師になり、教区の教会監督を務めた。

旋律の作曲は J.R. アーレ (Johann R. Ahle, 1625~73)。アーレはミュールハウゼンに生まれ、エルフトで音楽監督を務めたのちミュールハウゼンに戻りブラジウス教会のオルガニストになった。息子のヨハン・ゲオルクも同教会のオルガニストを務め、その後を継いだのが若いバッハだった。当初この旋律は別の歌詞が付けられた独唱曲であったが、後に会衆が歌いやすいように変更され、この歌詞と結び付けられて『ワイマール讃美歌集』に収録された。

『オルガン小曲集』の中で、同名の讃美歌の編曲が 2 曲 (BWV633, 634) 収録されているのはこの曲だけである。BWV634 が初期稿で、BWV633 が確定稿である。自筆譜では左頁に BWV634 が、右頁に BWV633 が書かれている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 161 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 228 番。

讃美歌 21 68 番。讃美歌 200 番。ルーテル教会讃美歌 246 番。

バプテスト教会新生讃美歌 135 番。(歌詞・高田重孝訳)

神の与えたもう、聖なる十戒・Dies sind die heiligen zehn Gebot・BWV635

旋律は、本来、12 世紀に歌われていた『船乗りの歌』だったが、『十字軍従軍の歌』に歌詞が変えられて歌われた。十字軍とは、キリスト教の聖地エルサレムをイスラム教徒の手から奪還するという名目で行われた、中世ヨーロッパの宗教戦争の歴史である。『神の御旨』によって始められた第 1 回遠征 (1096 年) 以来、300 年にわたって、民衆の軍隊、少年十字軍の挑んだ戦いを除く、正式な遠征だけでも 8 回が記録されている。成功をおさめた第 1 回以後、西欧諸国の社会的・政治的発達に伴い、西欧諸国の団結は次第に弱まり、士気も衰えていった。

『聖戦』『聖地エルサレム奪還』と言う名の宗教的で狂信的な殺戮が繰り返され、1290 年、キリスト教徒がエルサレムから追放された後、19 世紀半ばまでキリスト教徒が公式に、聖地エルサレム教会に詣でることはできなかった。

『十字軍従軍の歌』や『巡礼者の歌・In Gottes Namen Fahren wir・神の御名において、私たちは出発します』の旋律としても知られている。中世時代から、人々に親しまれていたこの旋律を、ルターは宗教改革に伴い、教理問答の『十戒』(出エジプト記 20 章 1~17 節) の解説のために選んだ。原歌詞は 12 節あり、1 節の序文に続き、2 節に第 1, 2 戒、と続き、順次解説して、第 11 節は『罪を認め、罪を自覚した人は、神の前にいかに生きるのか』を解き、第 12 節『仲介者となられたイエス・キリストに助けを求める祈り』で解説を終えている。単純な反復を伴った、明るい教会第 7 旋法『ミクソ・リディア調』の旋律であるが、最後の 2 フレーズが、短旋法に変化している。ルター派の讃美歌としては、宗教改革に伴って出版された 1524 年のプロテスタントの 2 つの讃美歌に収録されている。讃美歌の旋律は 2/2 拍子で 2 分音符を

主体にソプラノに旋律が置かれている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 37 番、77 番』

コラール編曲、678、679. 4 声コラール集 BWV298 .

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 231 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 66 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

天の我らの父よ・Vater unser im Himmelreich・BWV636

主の祈り (Pater noster・Oratio Dominica)

聖書ではマタイによる福音書 6 章 9～13 節、ルカによる福音書 11 章 2～4 節に記されている。教えの対象がマタイでは群衆に対して、ルカでは特定の弟子たちに対しての教えとなっている。古くは聖書の朗読(御言葉を会衆一同で唱えていた)であったのが、次第に抑揚が付けられて歌うようになったと考えられている。古くは 5 世紀の『アンブロシウス聖歌写本 340～397 年』で確認できる。グレゴリウス 1 世 540～604 年には正式にグレゴリオ聖歌として公式に歌われ聖歌として扱われるようになった。

御言葉として『天にまします我らの父よ、願わくは御名の尊まれんことを、御国に来たらんことを、御旨の天に行われる如く地にも行われんことを。我らの日用の糧を今日も我らに与えたまえ。我らが人に赦す如く、我らの罪を許したまえ。我らを試みに会わせず、我らを悪より救い給え。アーメン』が歌われている。

プロテスタント教会で唱えられている『国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり。』は Doxologia・ドクソロジー、栄唱、神を賛美する歌、式文として 12 世紀以後の記録が残されている。1517 年宗教改革以後、公式にプロテスタント教会が付け加えたもの。『Gloria in excelsis Deo』が The greater doxology が大頌栄と呼ばれ、『国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり。』は小頌栄と呼ばれている。

天の我らの父よ・Vater unser im Himmelreich

ルターによる『主の祈り』(マタイによる福音書 6 章 9～13 節)の解説を基にした 9 節の歌詞で 1538 年に曲が新たに作られている。『主の祈り』の各句を各節の初行において、それにルターが解説を付けることで歌詞が構成されている。教会教理問答集のための讃美歌。V.Schumann シューマンの讃美歌集には『マルティン・ルター博士により、短く解説され節を付けて歌えるようにした主の祈り』と題して、この旋律と共に 1538 年に出版された。この旋律の作者は不明であるが、ザルツブルグの修道士が作った『食卓の祝福の歌』が『ボヘミア兄弟団教会讃美歌』に取り入れられ、その旋律をルターが『主の祈り』の旋律として取り入れて編曲して、ルター派の讃美歌に採用したと推測されている。旋律は 6 フレーズから構成されていて、教会第 1 旋法『ドリア調』で書かれている。基本は D(レ)音であるが、荘厳な二短調に似ている。1524 年に『十戒について』『信仰宣言・クレドについて』が作られているので、同時期に『主

の祈り』も作られたと考えられているが、最初の歌われていた旋律は 14 年後の 1538 年に V, Schumann シューマンの旋律に置き換えられた。またルター自身が作曲を試みた旋律も知られているが、ルター自身がシューマンの旋律の方がより『主の祈り』の歌詞に相応しいと判断したので、ルター自ら自分が作ったその旋律を破棄している。

J・S・Bach 『教会カンタータ 90 番、101 番、102 番』 『ヨハネ受難曲 245, 第 5 曲』
コラール編曲、682, 683, 737. 4 声コラール集 BWV416.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 344 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 316 ~ 320 番。

讃美歌 21 63 番。(歌詞・高田重孝訳)

アダムの墮落で、人の本質は・Durch Adams Fall ist ganz verderbt・BWV637

歌詞は L, シュペングラー (Lazarus Spengler, 1479~1534) によって書かれた。シュペングラーはルターの友人で、宗教改革の推進者の一人で、常にルターを法律面から擁護した。シュペングラーは、弁護士であり町法律顧問、書記を務めていた。ルター派の教会内でも 18 世紀以降、教理的 content の強い歌詞の讃美歌が敬遠されるようになり、次第に歌われなくなっていった。イエッターは『宗教改革時代に成立したこの教化の強い告白の歌は、その発言が全て冷静なものにもかかわらず、次第に力を増し、詩句から詩句へと高まっていき、峻厳で大胆な生活感情とプロテスタント信仰の反抗的な確信を物語っている』とこの讃美歌の価値を擁護している。確かに、讃美歌の価値は 1 節のみの歌詞の内容で決まるものではなく、歌詞の中心主題で判断するものである。この讃美歌の中心主題は 7 節の『神に望みをおき、信頼する人は、決して損なわれることがない・Wer hofft in Gott und dem vertraut, der wird nimmer zu Schanden』にある。

旋律はこの歌詞と共に 1533 年に出版されたが、作曲者は不明。『パヴィアの戦い』の勇敢な傭兵を称えた歌の民謡が元歌であると推測されている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 18 番、109 番』

コラール編曲、705、1101、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 243 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 73 番。

讃美歌 21 には採用されていない。ルーテル教会讃美歌 304 番。(歌詞・高田重孝訳)

救いは来たりて、恵みと誠を・Es ist Heil uns Kommen her・BWV638

歌詞の作者は、P, スペラトゥス (Psul Speratus, 1484~1551)。本名は Hoffer (希望する人)、または、Offer (申し出る人) で、当時良く行われていたように本名をラテン語化した名前である。フライブルクや、パリ、イタリアでも学んだと言われているが、バイエルンのディンケルスビュール、ビュルツブルクでカトリック教会の司祭になるが、後に改宗してルター派の牧師になり、オーストリアやハンガリーで説教者を務めた。司祭でありながら結婚した最初の人として

も知られ、1522年にカトリック教会から異端者として火刑を言い渡されるが、後に恩赦を受けている。ルターの推薦を受けて、ケーニッヒスベルクに招聘され活躍する。

『救いは来たりて、恵みと誠を・Es ist Heil uns Kommen her』の歌詞は、彼が獄中にいる時に読んだローマ人への手紙 3 章 28 節『人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。』に基づいている。

旋律の作者は不明。宗教改革以前の復活祭の讃歌『女たちよ、男たちよ、喜べ、キリストは復活された・Frewt euch,yhr frawen und yhr man, das Christ ist auferstanden』が原曲と言われている。宗教改革後の 1524 年に出版された最初の讃美歌集に収められている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 9 番、86 番、155 番、186 番』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 342 番

J・S・Bach,389 Choralgsange 86～90 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

主イエスよ、あなたを呼びまつる・Ich ruf'zu dir,Herr Jesu Christ ・BWV639

『オルガン小曲集』だけでなく、バッハの『オルガン・コラール』の中で最も感動的であり、美しい感傷的旋律のゆえにオルガニストに好んで弾かれ、会衆にも感動を与える作品のひとつ。バッハは当初の『コラール前奏曲集』の 90 番、『キリスト者の生活と歩み』の中に組み込む計画でいたが、実際は『コラール小曲集』の 40 番に置き換えている。

この曲は他の『オルガン小曲集』の編曲とは明らかに様式を異にしている。書法は 3 声で書かれ、旋律はカンタータの『アリア』のように哀愁を漂わせながらも優雅であり、軽い装飾を施されてソプラノに置かれている。アルトとテノールの分散和音は 16 分音符が主体で、4 つずつスラーで繋がれ、中音域の弦楽器を模倣している。ベースには終始留まることのない 8 分音符が、罪に沈む心の悲しみを表現している。バッハは、歌詞の意味と物悲しい旋律から、このような音楽的表現を見出して感動的作品に仕上げている。

作詞者は J,アグリコラ (Johann Agricola, 本名 Schnitter, 1492 か 94～1566)。宗教改革者ルターゆかりの地アイスレーベンに生まれ、ルターの生徒であり友人でもあった。アイスレーベンの聖アンドレ学校の校長、説教者を務めた。またヴィッテンベルク大学の神学の講師も務めたのち、ベルリンの宮廷説教者になった。ルターの宗教改革の発端となった『95 カ条提題』の発表 (1517 年) を実際に見聞きするが、ルターと律法廃棄問題をめぐって対立した。讃美歌の原詩『主イエスよ、あなたを呼びまつる』は、発表当初はパンフレットの形で流布したが、1529 年にヨーゼフ・クルーク (Joseph Klug) の編纂した讃美歌集に、この旋律と共に収められた。旋律の作曲者は不明。

バッハはこの曲をヘ短調に編曲しているが、会衆が歌うための原曲は短 3 度低い短調の二調 (ドリア調なので、調号は付いていない) で書いている。バッハ自身もこの曲を好んで演奏していた。バッハは三位一体後第 4 主日のために、同名のカンタータ BWV177 を作曲している。全 5 節の歌詞を用いて作曲して、最後の 5 節にコラールとして使用している。他にはカンタータ 185

番の第 1、6 曲に使用している。

J・S・Bach 『教会カンタータ 177 番、185 番』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 343 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 183、184 番。

バプテスト教会新生讃美歌 564 番。讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

主に希望をおき、主は我を支えたもう・In dich hab ich gehoffet, Herr・BWV640

バッハはこの歌詞に 2 種類の旋律による讃美歌の編曲を『コラール小曲集』のために書こうと考えていた。残された自筆譜には、左のページに曲目と 6 段の 5 線が引かれているが、何の書き込みもない。右のページには『alio modo・別の方法で』と書かれて、この曲が記譜されている。書かれなかった曲の旋律は『マタイ受難曲 32 番』『クリスマス・オラトリオ 46 番』『カンタータ 52 番の終曲』に用いられたコラールと考えられている。当時はこちらの旋律で讃美歌が歌われていたからである。

作詞は A, ライスナー (Adam Reißner, 1496?~1582?) 傭兵の生みの親であるフルンズベルク將軍の秘書としてイタリアに同行して、後にシレジア地方を中心に『人の世ならぬ哲学』を説いたシュヴェンクフェルト (Kaspar von Schwenckfeld, 1489~1561) の信奉者となり、その運動に加わった。

旋律はライプツィヒ教会の合唱長であった S, カルヴィジウス (Seth Calvisius, 1556~1615) の作曲で、彼の編集した讃美歌集に収められている。冒頭の 5 度の 2 回の跳躍が印象的な旋律で、続く旋律の中の跳躍も力強い印象を与えていて、主に信頼する力強い信仰を表わしている。

教会第 1 旋法『ドリア調』で書かれていて、歌詞に相応しい毅然たる讃美歌である。

J・S・Bach 『教会カンタータ 52 番、106 番』『マタイ受難曲 BWV244, 第 32 曲』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 275 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 212~214 番。

讃美歌 21 には採用されていない。(歌詞・高田重孝訳)

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein・BWV641

作詞 パウル・エーベル (Paul Eber, 1511~1569)。

原曲 ヨハン・バプティスタ・セラヌス (Johann Baptista Serranus 1540~1600)

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein・BWV641

作詞 パウル・エーベル (Paul Eber, 1511~1569)。

エーベルはウンターフランケンのキツィンゲンに生まれ、ヴィッテンベルク大学の古典語、自然科学の教授を務めた。ルターの死後、ヴィッテンベルクの市教会牧師兼教区教会総監督になり、ヴィッテンベルク大学長として、メランヒトンと共に、ルターの死とカトリック教会に対するシュマルカルデン戦争の敗北後のプロテスタント陣営の混乱と不安の中で、プロテスタ

ント教会陣営を立て直し、教会を守り抜くために指導的役割を果たした。当時のヴィッテンベルクは神聖ローマ皇帝軍に占領され、ヴィッテンベルク大学は閉鎖され、保護者だった選帝侯は捕虜となり連れ去られた。まさにルター教会は存亡の危機に瀕していた。その中でエーベルはメランヒトンと共にルター派の信徒を励まし、祈りの中で団結を守り、苦難を耐え忍んで、ついに 1555 年、アウグスブルグ和議に持ち込んだ。この詩は、それから 10 年後、今度はトルコ軍が再びハンガリーに侵攻してきた。同時期ペストも蔓延して、ヴィッテンベルクの街を脅かしていた時期にこの詩は作られた。この時、共に戦ってきたメランヒトンもすでに死去していて、エーベルはただひとりでルター派の重責を担っていた。エーベルはひたすら神に助けを祈り求めている。その祈りが讃美歌になった。彼に作ったこの讃美歌は 1 節ごとで完結しているのではなく、7 節ある原詩は、1 節～4 節、5 節、6～7 節の 3 部で構成されていて、全説を把握して、はじめて讃美歌の主題の意味が理解できる主旨の讃美歌である。

旋律の原曲は、1545 年、ジュネーヴのサン・ピエール教会のカントールだったギョーム・フランクがカルヴァンの依頼によってカルヴァン派の『ジュネーヴ詩編歌』の『十戒』のために書いた曲が原曲と言われていて、エーベルの弟子のヨハン・バプティスタ・ゼラーヌス (Johann Baptista Serranuns, 1540~1600) が手を加えた旋律である。

ヨハン・バプティスタ・ゼラーヌス (Johann Baptista Serranuns, 1540~1600)

ゼラーヌスはフランケン地方のアンスバッハに生まれ、少年時代はアンスバッハの宮廷礼拝堂の聖歌隊で歌っていた。ヴィッテンベルクでエーベルに学び、アンスバッハのカントール兼牧師になり、生涯をアンスバッハで過ごした。

1 節だけを読むと救いも希望もないように思ってしまうが、2 節以降に、神の慰めに委ねる信仰が明るい旋律と共に歌われている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 366 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 358、359 番。

讃美歌 21 526 番。ルーテル教会讃美歌 468 番。バプテスト教会新生讃美歌 439 番。

(歌詞・高田重孝訳)

愛する神にのみ、全てを委ねて・Wer nur den lieben Gott läßt walten BWV642

宗教詩のみならず作曲もした G, ノイマルク (Georg Neumark, 1621~1681) の讃美歌が原曲。ノイマルクはチューニンゲン地方のランゲンザルツァに生まれ、ケーニッヒベルクで法律を学び、有名な S, ダッハの芸術サークルに属した。ワイマールの図書館司書を務め、宮廷詩人であるばかりか、ピオラ・デ・ガンバ奏者としても有名だった。この曲は 1657 年に『その重荷を主にゆだねる者を主は豊かに支えてくださる』という言葉に基づく慰めの歌の題で発表された。原曲は 4/6 拍子で繰り返される短調の旋律が、平行調に転調した後、また原調の短調に戻る哀

愁を帯びた美しい旋律を持っている。バッハはこの漂うような旋律を均等な 4 分音符にして、堅固に構築した旋律に整え、さらに第 5, 6 フレーズの旋律を変更して讃美歌にした。

原曲の 4/6 拍子から、均等な 4 拍子へのリズムへの変更は、下声の 3 声部のモチーフの展開を意識した結果と思われる。2 つの 32 分音符を含むモチーフは、すでに BWV616『平安と安らぎ、御言葉のとおりに・Mit Fried und Freud ich fahr dahin』有名な『シメオンの讃歌・Nunc dimittis』と呼ばれる聖句に基づく讃美歌の編曲に現われているが、讃美歌の主題が違うために、この讃美歌では同じ 32 分音符でも性格が全く違う使い方がされている。BWV616『シメオンの讃歌』では『救い主、幼子イエスに会うことのできた喜びと、預言された通りに、静かにこの世を去る喜び』とが表現されているが、この讃美歌の編曲では『人生での激しさといら立ちの中にある、神に対する堅い信仰と信頼による慰め』が表現されている。

バッハ自身、この旋律をことのほか好んで、カンタータ 93 番の主題にしている。その他、カンタータ 27 番第 1 曲、84 番第 5 曲、88 番第 7 曲、166 番第 6 曲、179 番第 6 曲、197 番第 10 曲に使用している。

バッハは当初の『コラール前奏曲集』の 113 番、『十字架と迫害』の中に組み込む計画でいたが、実際は『コラール小曲集』の 43 番に置き換えている。

また、後のオルガンのための『シューパー・コラール集』の BWV645 第 3 曲でも、この旋律を主題として使用している。原曲は『教会カンタータ 93 番 BWV93』の第 4 曲。ソプラノとアルトの二重唱。原曲のカンタータ 93 番では、ソプラノとアルトが途切れることなく旋律を掛けあいながら歌い、要所で弦楽器がユニゾンでコラールの旋律を挿入している。つまり、第 1 曲とは逆に、二重唱が旋律を支配している。オルガンのために編曲された『シューパー・コラール集』では右手にソプラノ、左手にアルト、ペダルにコラールが割り振られている。

ハ短調 (C minor) 4/4 拍子。

J・S・Bach『教会カンタータ 21 番、27 番、84 番、88 番、93 番、166 番、179 番、197 番』
コラール編曲、690、691、4 声コラール集 BWV434.

シューパー・コラール集 BWV647.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 369 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 367 ~ 373 番。

讃美歌 21 454 番。讃美歌 304 番。ルーテル教会讃美歌 324 番。

バプテスト教会新生讃美歌 434 番。(歌詞・高田重孝訳)

全ての人みな、死に定められ・All Menschen müssen sterben・BWV643

未完に終わった自筆譜を見ると、左ページの左上に『All Menschen müssen sterben』の題が書かれて 6 段の 5 線譜が引かれているが音符は書かれていない。しかし、右のページの右角に薄く鉛筆でページ数『149』と書かれていて、タイトルにあたる場所に『alio modo・別の方法で』と但し書きがあり、この編曲が記譜されている。本来バッハは、この歌詞に対して 2

曲の異なった旋律による編曲を意図していたが、実際完成したのは右ページのこの第2の旋律による編曲であった。左ページの第1の讃美歌には、同じ歌詞を持つ別の旋律による編曲を意図していたが、同名の第2の讃美歌の旋律による讃美歌の編曲を右のページに先に書き込んだ。左のページの第1の旋律は、J.Ph,キルンベルガーと、Ph,E,バッハが編した4声のコラール集『371のコラール集』に153番（BWV262）として収録された、J,ヒンツェの作った旋律と考えられている。当時はこちらの旋律で讃美歌が歌われていたからである。

歌詞はJ,G,アルビヌス（Johann Georg Albinus,1624~1679）によって作られJ,ローゼンミュラー（Johann Rosenmüller,1620~1684）により書き直されたと言われている。

アルビヌスはヴァイセンフェルス近郊に生まれ、ナウンブルクの聖オトマール教会の牧師を務めた。ローゼンミュラーはザクセンに生まれ、ライプツィヒの聖トーマス教会の音楽監督・カントール代理を務めた。時代的に歌詞はバロック色の濃い歌詞である。

旋律はC,アントン（Christoph Anton,1610~1658）が作曲した世俗歌曲『ダフニスは数日前に出かけました・Daphnis ging vor wenig Tagen』が転用されている。原曲に比べて、賛美歌に転用された旋律は調性的になり、冒頭の4小節のト長調（G major）の部分は反復され、属調の二長調と平行調のホ短調に転調した後、再びト長調に戻る形式に書き直されている。

バロック時代の馴染のある古典的で民謡風な旋律が讃美歌に転用され編曲されている。

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第329番

J・S・Bach,389 Choralgrsange 17、18番。

讃美歌21には採用されていない。（歌詞・高田重孝訳）

ああ、虚しくはかない人の命・Ach wie nichtig, ach wie flüchtig・BWV644

バッハ自身が意識して、原詩の順序を変えたのかは定かではないが、原詩は『ああ、いかにはがなく、ああ、いかに虚しいことか・Ach wie flüchtig,ach wie nichtig』になっている。

確かに曲の最後の8節の始まりは『ああ、虚しくはかない人の命・Ach wie nichtig, ach wie flüchtig』になっているので、8節の歌詞をそのまま『オルガン小曲集』の編曲の題にしたのかもしれない。当時ドイツは、30年戦争の後を引きずり、カトリック教会とプロテスタント教会の信仰問題をめぐって国家は権力争いに終始して、国全体が疲弊していた。また、ペストなどの病気が蔓延して、人口の3分の1が亡くなるという衛生面での現実的問題も抱えていた。

音楽もこの時代背景を受けて、緊張に満ちた二面性『世の無常さと生きている心の喜び』『死と生の紙一重の人生』『隠棲と世の快樂の追求』を表わした芸術が生まれた。宗教改革当時の讃美歌は、教会の確立化や教理思想の表現に重点が置かれていたが、100年後の讃美歌は宗教改革当時とは違った、個人の思想の表現や感情の表現が歌われるようになった。

この讃美歌の作詞・作曲家の、M フランク（Michael Franck,1609~1667）は中部ドイツのチュービンゲン地方のシュロイジンゲンに生まれた。豊かな音楽的才能に恵まれながら、父親が早くに亡くなったために、家業のパン屋を継いで生計を立てていた。その後、勉学をしてコーブルクの町の学校の教師を務めた。讃美歌の作詞だけでなく、音楽面でも優れた才能を示した。

歌詞はバロック時代の特徴を持つだけでなく、当時流行していた『言葉遊び』の手法が用いられている。ドイツ語の『霧・Nebel』の文字を、逆に綴ると『Leben』となる。つまり『人生は霧のようであり、一瞬にして消え去る霧のようだ』の言葉に例えている。

この讃美歌は三位一体後第 24 主日と結び付けられ歌われるようになった。移動祝日である復活祭とクリスマス前の 4 回のアドヴェント・待降節主日の設定により、年によってはこの三位一体第 24 主日が存在しない年もある。教会暦の終わりには『終末』を意識して『死、神の裁判、復活、再臨、永遠の命』に関する主題が取り上げられて説教される。

旋律もフランクによって作られているが、後にクリューガー（Johann Crüger, 1598~1662）によって手が加えられて旋律が整えられ、現在の旋律として歌い継がれている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 26 番』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 528 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange には採用されていない。

讃美歌 21 には採用されていない。（歌詞・高田重孝訳）